



バーチャルリアリティによって再現された紫禁城「大和殿」の画像

©The Palace Museum
Digital Institute

印刷博物館

クス画像による仮想現実)シアターなどを具備し、開館以来既に約一七万人の来館者数を数えている。

◆トッパンホール

「トッパンホール」は、ホール全体を「浮き構造」にすることで、外部から振動・騒音を遮断し、高い音響効果を誇るクラシック専門のコンサートホールである。

「感性」を感じる心」が重視され、「感動」が

コミュニケーションの重要なファクターとなつていく中で、音楽は、世界共通の言語と言われ、最も広く愛されているコミュニケーション手段である。コミュニケーションをキーワードに事業を展開するトッパンは「感性」を育み、「感動」を共有することをコンセプトにこのホールを開設した。

単にコンサートを主催するのみにとどまらず、若手演奏家を育成する「エスポワールシリーズ」などを通じて、音楽という文化の創造と発展をめざし、活動を行っている。

◆デジタルアーカイブの展開

これら文化施設の運営のほか、トッパンではさまざまな文化に貢献する取り組みを行っている。デジタルアーカイブ(歴史的・文化的資産などさまざまな分野の情報をデジタル映像やデジタル文書として保存・蓄積するもの)はその一例である。代表的なものとして中国故宫博物院と共同で設立した「故宫文化資産デジタル化応用研究所」と進めている故宫文化資産のデジタルアーカイブ構築がある。ここでアーカイブ化されたデータは、中国清王朝全盛期の華やかな紫禁城をバーチャルリアリティの手法を用いて再現した「紫禁城・天子の宮殿」として公開されている。

最近の取り組み

トッパンでは、このたび、国連「グローバ

ル・コンパクト」(注)に参加・支持を表明した。今後、人権、労働、環境、腐敗防止に関わる一〇原則を企業経営に取り込み、社会の持続的な発展に貢献するようCSRを推進していく。また、トッパンでは、CSRの取り組みを展開していく中で、各ステークホルダーとのコミュニケーションを、CSRマネジメントの最重要課題として認識している。

すでに二〇〇五年から、社内のCSR推進会議に外部ステークホルダーを招き、CSR活動の年間総括と新たな目標設定に助言、指導をいただいている。また、二〇〇六年八月には、トッパンのCSRはどうあるべきか、そのためには、ステークホルダーとどのようにコミュニケーションを図っていくべきかを検証するため、ステークホルダーダイアログを開催した。このような直接的な情報開示と対話のほか、今秋発行した「CSRレポート2006」においても、第三者審査のほか、第三者意見執筆者とのレビューを通じ、開示情報の拡充とさらなる透明性の向上に努めた。現在策定が進められているISO26000(社会的責任に関するガイドランス)では、ステークホルダーとのエンゲージメントが重視される。トッパンは、ステークホルダーとの対話をさらに進め、ステークホルダーとのエンゲージメントを軸に、社業を通じたCSRを実践していきたいと考えている。

(注)グローバル・コンパクト(Global Compact): 1999年の世界経済フォーラム(ダボス会議)で、国連のアナン事務総長が提唱

「企業像」の実現がCSRの取り組み

凸版印刷法務本部コンプライアンス部部长

船山邦彦
ふなやま くにひこ



トッパンは、創業百周年にあたる二〇〇〇年に、「二十一世紀にあるべき姿を「TOPPAN VISION 21」としてまとめた。これは、トッパンの新たな「企業像」と「事業領域」から

なっており、「企業理念」「経営信条」「行動指針」で構成される「企業像」を実現することがトッパンにとってのCSRであるとの認識のもと、CSRの取り組みを進めている。

この「企業像」を実現するためCSRの取り組みを行うにあたっては、「経済・社会・環境」の三つをバランスよく発展させていくトリプルボトムラインに照らし合わせ、「六つの重点テーマ」を設定している。①コーポレート・ガバナンス、②コンプライアンス、③顧客満足の向上、④人財の尊重と活用、⑤社会文化貢献活動、⑥環境への取り組み。毎年この六つの重点テーマごとにそれぞれの実施項目を掲げ活動を展開している。

本稿では、トッパンのCSR活動の中でも特徴的な文化貢献への取り組みと、直近の活動に絞って紹介する。

「コミュニケーションをキーワードに文化の創造・発展に向けて」

約五六〇年前にグーテンベルクによって発明された「印刷」という技術は、蒸気機関が産業革命のまさしくエンジンであったのと同じように、文明・文化の普及に多大なる貢献をしたと言える。国内に目を転ずれば、百花繚乱の江戸の文化を支え、日本国内にそれを伝播したのも、木版画を主とする「印刷」技術の進歩に拠るところが大きかったと言える。

明治期に入り、「印刷」は三つの面で社会に貢献している。第一に「近代資本主義を確立するための紙幣や公債証書などの印刷」、第二に「文明開化を促進し、言論活動の担い手となった新聞の発行」、第三に「人々を啓発し近代国家確立への気運を高めた翻訳書、小説、雑誌の発行」である。

そのような中、一九〇〇(明治三十三年)に、旧大蔵省出身の技術者によって、当時の最新

鋭製版技法である「エルヘート凸版法」をもって創業したトッパンは、常に情報・文化を伝播し、社会や文化の発展に貢献することが、社業そのものであり、社会や企業の持続的発展に寄与するものであると考えてきた。

◆印刷博物館

東京都文京区のトッパン小石川ビルの中に併設された「印刷博物館」には、グーテンベルクが自ら印刷した「四行聖書」の一葉が保存されている。トッパンの創業から一世紀。百周年記念事業の一環として開設された「印刷博物館」は、企業理念にある「情報・文化の担い手としてふれあい豊かなくらしに貢献する」という考え方に基づき、人類の文明の発展に大きく貢献してきた印刷の役割や意義を、広く社会に発信していくことを目的に、世界に唯一の印刷をテーマにした博物館として誕生した。総合展示ゾーン、企画展示ゾーンのほか、活版印刷を中心とした印刷技術を体験できる「印刷工房」やバーチャルリアリティ(三次元立体)のコンピュータグラフィック